

会員の声 世論先行で「脱原発」撤回・スウェーデンの原子力政策-

はじめに

読賣新聞平成25年5月4日9面の、こんなタイトルが目飛び込んできた。『編集委員が迫る』の特集である。インタビュー相手は、アグネタ・リーシング女史で、世界原子力協会理事長である。女史はスウェーデン最大の電力会社バッテンフォール（前身は国家電力庁）の環境担当副社長を経て、2013年1月から現職、専門は放射線防護、と紹介している。以下、編集委員の問い、女史の答え、筆者のコメントを記す。

■原発への回帰

問い 脱原発に転じたきっかけは何だったのか？

答え 私たちは環境保護の意識が強い。原発を導入したのはダム建設をやめ、河川の自然を守りたかったからだ。石油依存からも脱したかった。1979年のTMI原発事故だ。原発の危険性をめぐる議論が起き、翌年の国民投票で2010年までに脱原発すると決めた。

問い 再び原発維持へ回帰したのはなぜか。

答え その後、原子力に代わるエネルギー源の議論が始まった。「風力と太陽光で大丈夫」という意見もあった。（化石燃料の利用に伴う）温暖化への懸念もあり、国民は政府以上に原子力を支持するようになった。政府は国民の後を追う形で、脱原発を撤回した。

筆者 この発端はやはり他国での原発事故だった。風力・太陽光発電への過度の期待と地球温暖化への危惧とが重なった。しかし、よく国民が原子力を支持したものだ。世論に政府が後押しされたというのは、日本では信じがたい。

■放射線のリスク

問い 原発のリスクはゼロではない。どう説得してきたのか？

答え どんなエネルギー源にも良い面と悪い面がある。原子力を他のエネルギー源と比べながら、利点を伝えていく必要がある。中でも放射線リスクをどう説明するかは重要だ。

問い チェルノブイリ原発事故ではスウェーデンも放射能汚染した。どう対応したのか？

答え 福島と似た状況だった。多くの間違いを犯した。政府は厳しい基準を定めた。人々が安心すると考えたからだ。だが、逆効果だった。かえって過剰な不安を募らせた。そこで基準を緩めた。

問い 日本は1ミリシーベルトが除染の目標値になった？

答え 私の経験から言えば、厳しすぎる。益より害が大きい。チェルノブイリでも住み慣れた土地に暮らせないことが、被曝よりも大きな健康被害をもたらした。様々な報告を読む限り福島の放射線レベルは低い。この水準だと今まで健康被害が出たことはない。

問い 住民の不安は根強いが？

答え スウェーデンと日本は似ている。どちらもきれい好きで、自然を守ろうとする。だから日本の人々の気持ちも苦しみも分かる。だが非現実的な措置は無意味だ。

問い 日本では専門家も信頼を失っている

答え 鍵を握るのは政府や電力会社、専門家の信頼を取り戻すこと。十分な情報の提供や分かりやすい説明が必要だ。

筆者 女史の専門が放射線防護とあってか、的確な答えが返ってきている。良い面と悪い面の認識が大切だ。基準を厳しくすれば人々が安心すると考えた、しかし逆の結果が出た。過剰反応の影響に我々は気づくべきであろう。日本でも帰還困難区域の住民がぼやいている。違った面の健康被害にも焦点を当てるべきだ。非現実的な措置を前政権は多く選択し、実施した弊害が現に出ている。信頼をどう取り戻すかが、本当に大切であろう。地道な努力が必要とされるだろう。

■原子力の将来

問い 目を世界全体に向けたい。福島の影響はどうか？

答え 原発の安全に対する信頼は揺らいだ。しかし、事故に関する情報が増え、理解が深まるとともに、多くの国

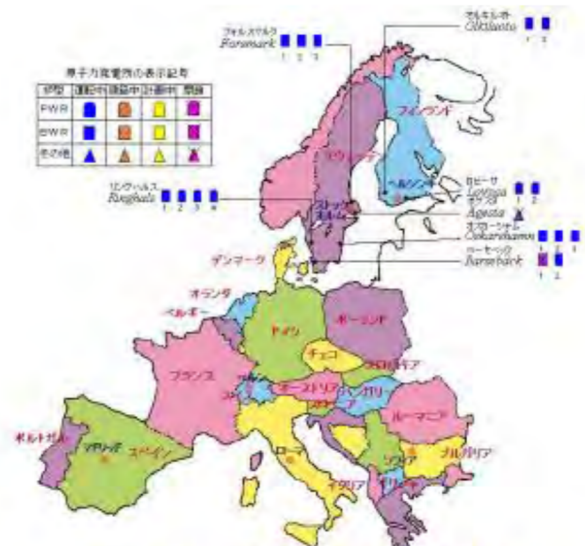


図1 スウェーデンの原子力発電所立地点

【出典】(社)日本原子力産業会議:世界の原子力発電開発の動向2001年次報告。(2002年5月), p.87

で原子力への支持は事故以前と同じ水準に戻っている。

問い 業界の展望はどうか？

答え 明るい。多くの国が原発新設を計画している。エネルギーはどの国にも重要なものだ。チェルノブイリなど重大な事故を経験したり、影響を受けたりした国も原子力を支持している。日本も事故を克服して同じ道を歩むと思う。

問い スウェーデンと同じく環境保護の意識が強いドイツは脱原発の道を選択したが？

答え スウェーデンは広い国土に800万人が住んでいる。生き残るために現実的になっている。一方、ドイツでは多くの人に原子力は悪というイメージがある。経済や技術というより感情にまつわる問題になっていると思う。

問い ドイツの脱原発政策の行方をどう予測するか

答え すでに8基を閉鎖した。今後、化石燃料の使用が増えていくだろう。もう数基は閉鎖すると思うが、その後、難しい段階が来て、脱原発を見直すのではと推測している。

筆者 太平洋戦争、関東大震災等多くの厄災を日本は見事に乗り越え、元気になってきた事実。日本も市民はエネルギー問題を自分のものとして学校教育以上に勉強したと思う。まさに「生き残るため」であろう。人々は教条や思いだけでは生きていけないのだ。現実問題に接すると、ドイツ人も時間が経てば理解し見直してくるのではないだろうか。

■廃棄物の問題

問い 原発には使用済み燃料から生じる放射性廃棄物の処分という厄介な問題があるが？

答え 問題は解決できる。容器に密閉すれば環境への拡散は防げる。使用済み燃料はプールで40年ほど冷却してから最終処分までに時間もある。多くの国は深い地層に埋める方法を考えている。最も進んでいるのはスウェーデンとフィンランドだ。場所ももう決まっている。数年後には建設が始まると思う。

問い しかし、他の国はどこもメドが立っていないのでは？

答え スウェーデンもフィンランドも環境保護の意識が強く、規制も厳しい。議論も尽くした。世界の良い前例になる。

問い 日本には新しい安全規制組織ができたが？

答え 独立性は重要だが、孤立すべきではない。国民や産業界や海外との対話が重要だ。

問い 日本は原発輸出に乗り出そうとしているが？

答え 日本の原子力産業は世界で高く評価されている。

問い 福島で事故を起こしたにもかかわらずなのか？

答え その通りだ。日本の産業界はその信頼性の高さを誇りに思うべきだ。

筆者 「議論を尽くした」の具体的な内容をもっと知りたい。そして日本も必ず乗り越えるだろう。前例のない状況に弱い日本も、スウェーデン、フィンランドの前例を生かしたいものだ。そして「孤立すべきではない」は妥当な意見である。孤立しがちな規制委員会はその趣旨を理解しミッションを見失うなど言いたい。また、我が国の科学技術を高く評価してくれていることは嬉しいことではないか。政治家・電力事業者・専門家の信頼が先決なるも、品質等を含む信頼性に言及していることは素晴らしい。

編集委員の大塚隆一氏は次のようにコメントを付している。

「リーシングさんの別荘は原発からわずか1キロほどの所にあるという。それだけ安全性に自信があるのだろう。原子力の将来にも一貫して楽天的だ。女史は原発の利用拡大を図る国際的な業界団体のトップであり、その発言は少々割引いて聞くべきかもしれない。スウェーデンの事情は地震国・日本と異なるものだ。だが、スウェーデンの人々がエネルギーの選択について、専門家を信頼し、現実的な議論を重ねてきたという話には正直なところ感心した。」

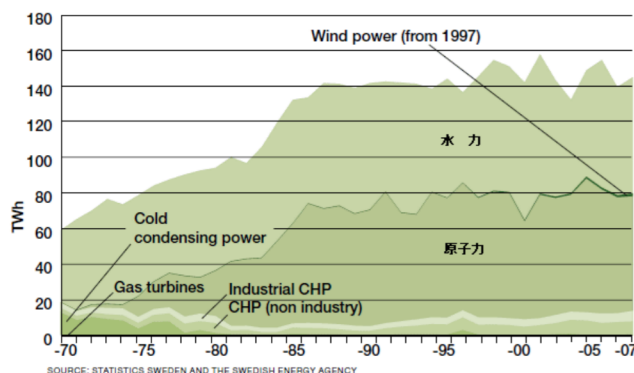


図2 スウェーデンの電源別発電電力量の推移

【出所】 Swedish Energy Agency: Energy in Sweden 2008, p86
<http://213.115.22.116/System/TemplateNavigate.aspx?p=Energimyndigheten&nc=Default&view=default&cat=/Broschyrer>

記事の注：スウェーデンの原発：現在10基が稼働中。総発電量に占める電力別の割合（2011年）は、水力43%、原子力39%、火力13%、風力4%。原子力は水力と並ぶ主要電源になっている。2000年以降は大半の世論調査で原発維持派が過半数を占めている。

筆者の注：世界原子力協会のHP

： <http://www.world-nuclear.org/WNA/>

記事から読み取ったこと

不幸にも前例のない重大な原発事故を経験した日本では、「安全」・「安心」に、ひたすらすがりたい気持ちでは理解できるも「日本人は、井の中の蛙になってはいないだろうか」。そう思うのは私だけではないこと

を、讀賣新聞の記事は例示してくれている。

編集委員の大塚隆一氏は《その発言は少々割引いて聞くべきかもしれない》と断っている。しかし教条主義的な脱原発派の人々にはこのくらいの話をして「馬の耳に念仏」であろう。彼らは「反対すること」に意味があるのであって、なぜ「反対するののかの意味を考えようとはしない」のではないのか。「原発の目的は何なのか」を彼らは考えたことがあるのだろうか。「被害妄想」に陥ってしまい外を見ようとしな。教条主義にひたすら走り、原点に戻ることができない。悪い面ばかりを凝視し、良い面を決して見出そうとはしない。科学的な観点から「事実」を見ようとしなくて片寄った声を信じてしまう。「バランス感覚」「現実感」を一切持たない。一旦信じたら、改宗するという心の広さ・豊かさを持ち合わせていない。「自分たちだけが清廉に生きることが出来る」、「自分たちだけが完璧な人生を歩める」と信じ切っている。

一方、原発維持派・推進派にも確かに反省すべきところが多々あろう。都合の悪い情報は中々開示しない傾向がある。世間が言う「安全神話」を吹聴してきてはいなかったか。説明も教えてあげるといように、目線が高かったのではないか。都合の良い面と都合の悪い面とを重み付けしてはいないだろうか。リーシング女史へのインタビューの答で《十分な情報の提供や分かりやすい説明が必要だ》などと言っていることに注目したいものである。

福島事故で当時の政権党が選択した「脱原発」と、スウェーデンの「脱原発」からの回帰の何れを今後とるべきか、「演繹法」か「帰納法」の方法論を示して若干論じたい。

有名な哲学者ベーコンが《科学とは既知の事柄を論理的形式で繰り返すのでなく、未知のものを攻略することである》と言い、「帰納法」の父たり得たと云われている。《知識の不断の進歩こそ、古い知識が、権威のゆえに受け容れられるドグマティックな教義に墮落することを、また、知らぬ間に迷信や迷妄に退化することを防ぐ唯一の確実な道である》（ジョン・デューイ著『哲学の改造』清水幾太郎ら訳・岩波文庫42ページ）を思えば、リーシング女史・原発維持派・原発推進派はその「帰納法」を選択し、脱原発派は「演繹法」の虜になっているのではないだろうか。

結言

- 1)世界の動きから日本を見ると、ガラパゴス化してはいないか。スウェーデンでは世論が後押して政府に「脱原発」を撤回させている。
- 2)先例とか前例のない現象に直面したときにふらふらして歩むべき方向性を見失い、空気に寄りかかり意思決定するのは日本であり、スウェーデンは逆であろう。
- 3)脱原発派は古典的な「演繹法」にしか活路を見いだせないで迷路に入り込んでいる。政府・電気事業者・専門家は、更に情報を開示して、人々が原発の良い面を見出し、世論がそれを後押しするような空気を作りだそうではないか。（Y.S記）